

キャリア教育の
実践に向けて
新たな
第二部

(1) 地域連携学校教育による子どもの起業家教育

関 隆晴(大阪教育大学教職教育研究開発センター 教授)

(2) 学びから始めるキャリア教育

～プロジェクト・ベース学習(PBL)の適用～

上杉賢士(千葉大学大学院教育学研究科 教授)

(3) 産業社会からの要請の変化と対応

小杉礼子(独立行政法人 労働政策研究・研修機構 研究員)

(1) 地域連携学校教育による子どもの起業家教育

関 隆晴

(大阪教育大学教職教育研究開発センター 教授)

平成18年度、文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」(現代GP)が募集され、大阪教育大学では、テーマ「地域活性化への貢献」というプログラムに応募しました。現在、競争的な環境の中で大学の教育改革が進んでおり、本学も教育改革に取り組んでいます。その1つとして、学生の教育改革に資する取り組みということで、本学としましては、「地域連携学校教育のできる教員養成地域に愛着を持ち地域に根ざした子どもを育成できる教員養成プロジェクト」と題して申請し、採択されました。

この内容には、「森林体験学習」「キッズ・ベンチャー」「スタディー・アフター・スクール」と3つあげてあります。これらは学校を舞台にして、地域人材と大学の教員、学生が参加して、学校で行う授業です。これを地域連携学校教育と名付けました。地域連携学校教育という言葉から分かるように、地域と連携して行う学校での教育を意味しているわけで、別に他にもいろいろな取り組みがあり得ると思います。とりあえず、今はこの3つに取り組んでいるところです。

本学では、「プレゼンテーション能力」「コミュニケーション能力」「課題解決力」「実践的教育指導能力」など、いろいろな能力を持った学生を養成しようとしています。学生がこの地域連携学校教育の場に参加することによって、さらに「子ども理解力」「コーディネート力」といったものを身に付けて、地域連携学校教育のできる教員を養成していこう、そういうシステムをつくらう、そして地域連携学校教育を確立する、ということが目標のプロジェクトです。

このプロジェクトの1つ、キッズ・ベンチャーは、キャリア教育の一環として取り組んでいるものです。こ



れは2001年、柏原市教育委員会と産業振興課に提案して、一緒に始めることになった活動です。2002年、ある小学校で、それまで実施されていたキッズ・マートという活動にものづくりを取り入れた活動を試行しました。そして2003年、起業家教育を行う(株)セルフウイングの協力を得て、実際にキッズ・ベンチャーというものを柏原小学校4年生100人近くを対象に始めました。2004年、同じ小学校で2年目の活動を行い、いよいよ本学の学生、院生、教員を中心に、キッズ・ベンチャーを始めました。

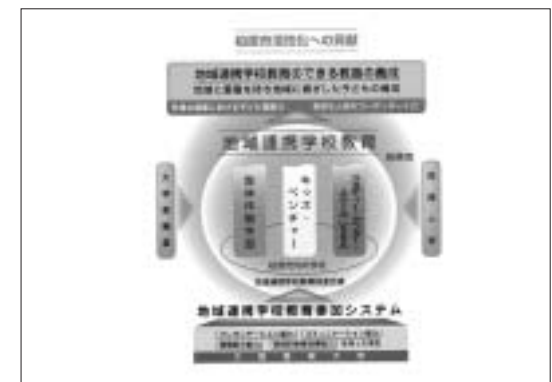
2005年には、大学院生、本学教員による実施に加え、地域のボランティア、このときは3チームに協力してもらえるようになりまして、いわゆる地域と連携した学校教育という形でのキッズ・ベンチャーの全貌が見え始まりました。そして2006年、現代GPに採択されました。柏原市の対応としては、それまでは産業振興課との連携が窓口だったのですが、教育委員会が窓口となって進めるという形になりました。2007年も、5年目の取り組みとして、同じ小学校で実施しています。

キッズ・ベンチャーとはどういうものか、昨年度の活動をDVDに収めてありますので、そのDVDの内容を

平成18年度 文部科学省
「現代的教育ニーズ取組支援
プログラム」(現代GP)
テーマ①: 地域活性化への貢献(地元型)

【プログラムの背景】
各大学が、教育面での改革を推進するとともに、個性・特色を一層明確にしていくことができるよう、国公立大学を避け競争的な環境の下で大学改革への取組を支援していく必要があります。

大阪教育大学現代GP
「地域連携学校教育のできる教員養成
—地域に愛着を持ち地域に根ざした子どもを育成できる
教員養成プロジェクト—」



キッズ・ベンチャーの歩み

2002年 キッズ・マートからキッズ・ベンチャーへ(旭ヶ丘小学校) キッズ・マート試行

2003年 キッズ・ベンチャー初実施(柏原小学校)
㈱セルフウイングによる支援

2004年 キッズ・ベンチャー2年目の実施(柏原小学校)
大学院生と大学教員による授業の実施、指導案作成
「成長するキッズ・ベンチャー」

キッズ・ベンチャーの歩み

2005年 キッズ・ベンチャー3年目の実施(柏原小学校)
大学院生と大学教員による実施、地域ボランティアの参加、担任教諭の積極的参加、パンフレット作成
「見えてきたキッズ・ベンチャーの全貌」

2006年 キッズ・ベンチャー4年目の実施(柏原小学校)
現代GP採択、連携窓口が教育委員会に変わる、地域ボランティア4チームに、担任教諭引き気味、ワークブック作成
「地域連携学校教育からみたキッズ・ベンチャー」

2007年度 キッズ・ベンチャー5年目の実施(柏原小学校)

平成18年度
柏原市立柏原小学校における
キッズ・ベンチャー

記録映像DVD(12分)

生涯にわたるキャリア発達の形成過程
に関する総合的研究報告書(Ⅳ)
一研究の総括・講演録・座談会一

平成18年3月発行
研究代表者 国立教育政策研究所生涯学習研究部部長 山田 美尚

- 表1. キャリア教育において育成すべき能力と「キッズ・ベンチャー」における能力形成の場面 講演録 pp.93
- 表2. 「キッズ・ベンチャー」の特徴的な指導の方法 講演録 pp.94
- 作成: 大阪教育大学教育学部教授 野田文子

ご覧いただけたらと思います。

(記録映像DVD上映・活動内容については次頁参照)

このプログラムがキャリア教育とどのように関連しているかということについては、図表5-1の対応表を参照ください。これは、大阪教育大学教育学部・野田文子教授が国立教育政策研究所の研究会で発表したものです。そして、キッズ・ベンチャーの指導の方法として特徴的なところを野田教授があげています(図表5-2)。

ひとつ面白いのは、「(1) 葛藤場面の創出」です。簡単に言うならば、あえていろいろな問題、意見が

合わない場をつくり出すということです。特に役職を選ぶときに誰が社長になるかということでは、大体よくもめたりします。

私としては、毎年、子どもの感想文を見るのが非常に楽しみになっていて、これを続けていける大きなモチベーションの1つになっています。こうした取り組みを5年続けていますが、次に、このキッズ・ベンチャーにはどういった意味、位置づけがあるか、簡単に話したいと思います。

私は、日本の大きな教育改革の流れの中にキャリア教育もあると思っています。

生涯学習の流れは、1965年ぐらいから世界で議論されるようになり、1970年代になるとそれは日本にも入り、80年代には臨時教育審議会でも議論されるようになりました。

日本の教育改革の流れにおけるキャリア教育

キッズ・ベンチャーの活動内容(平成18年度柏原市立K小学校)

1) 活動経過

キッズ・ベンチャーを始めよう: 概要説明と動機付け(1時間) 作ってみよう: ものづくり体験(6) どんな商品があるかな: 商品見本展示(1) グループ分け(担任) 新聞記者になろう: 新聞の作り方、インタビューの仕方(1) 地域のお店を調べてみよう: 商店街の紹介と商店街調査、商店街新聞の作り方(1) どんな商品を作ろうかな: 商品開発、知財教育(3) 夏休みの宿題: 商店街調査、商店街新聞作り、商品開発 お店新聞コンクール: 児童による1次選考会(1) 教諭、大学教員で2次選考会を行い、JAバンクと郵便局で展示 会社をつくらう: 会社名、理念、商標、役職の決定、知財教育(1) どんな商品をいくつ売ろうかな: 商品と売り上げ目標の決定(1) 必要なお金はいくらかな: 原材料費と経費の計算(1) 銀行でお金を借りよう: 銀行の役割を学び、お店作りに必要なお金を借りる(2) 材料を仕入れよう: 事業計画に基づく仕入れ(1) 製造工場で働こう: 商品作成(8) 宣伝をしよう: 看板、のぼり、ポスター、チラシづくり、知財教育(2) 売り方を考えよう: 店主から話を聞き、挨拶の仕方を学ぶ(1) 販売準備をしよう: 商品のチェック、値札付け、お釣りの準備(1) わくわくキッズ・マート: 陳列、販売活動(4) いくら儲かったかな: 収支決算、銀行に返済(2) 澡活動を振り返ってみよう: 振り返り(1) 澤新商品を開発しよう: 知財教育(1) 濼利益の使い道について考えよう(担任)

2) 出店会社名と商品

会社名	取扱商品	児童数	サポーター
ひょうたんDX	栽培した瓢箪の加工商品	11	学生・退職教員
ウインターナチュラルショップ	葡萄の蔓のリース・木の実の加工商品	11	学生・大学教員
スーパー・ザ・ねん土ロー	手作り粘土の焼き物商品	10	学生・大学教員
マルタ君の木工細工屋	自然素材による木工細工	10	学生・地域ボランティア
木工細君	木材を使った加工商品	10	学生・大学教員
ボタンのベストベンチャー	ボタンを使った壁飾り他	9	学生・地域ボランティア
ごみパワーアップ会社	廃油石けん等リサイクル商品	9	学生・地域ボランティア
ぞめもの畑	タマネギや藍で染めた布商品	9	学生・大学教員
オリジナルノート店	メモ帳、猫の写真入りカレンダー	10	学生・地域ボランティア
手作り手芸店	マフラー、手鏡、コサージュ等の手芸品	10	学生・地域ボランティア
トリプルラッキー店	カラーワイヤー加工品、キャンドル、地元野菜	10	学生・大学教員

柏原市におけるキッズ・ベンチャーの歩み

2001年、キッズ・ベンチャーを立案し、柏原市市民部産業振興課と柏原市教育委員会に提案。2002年、「キッズ・マートからキッズ・ベンチャーへ」として柏原市立A小学校で5年生2クラスを対象に試行。柏原市産業振興課と商工会の協力により、キッズ・マートを開催。2003年、柏原市立K小学校において4年生3クラスを対象に、(株)セルフウイングの支援を受け、柏原市産業振興課、商工会の協力によりキッズ・ベンチャーを実施。児童と教諭によるテーマソングの作成、養護学級からの出店と近隣幼稚園からのお買いもの学習も参加。2004年、大学教員、大学院生、学部生を中心にキッズ・ベンチャーの指導案とワークシートを整備、柏原市産業振興課、商工会、教育委員会、小学校校長、教諭、大学教員、大学院生、学部生等からなるキッズ・ベンチャー研究会で運営。子どもの商品開発に校長、担任教諭、大学教職員・院生・学部生の他、福井大学教員、2企業の協力あり。2005年、子どもの商品開発に退職校長、担任教諭、大学教職員・院生・学部生の他、地域ボランティア(3チーム)の参画があり、キッズ・ベンチャーの全貌がみえはじめる。キッズ・ベンチャーのパンフレット作成。2006年、現代GPに採択される。柏原市の対応窓口が産業振興課から教育委員会に替わる。ワークシートをワークブックとしてまとめる。地域ボランティア4チームで5店舗出店。2007年、柏原市立K小学校での5年目の取り組みを実施中。毎年子どもたちの感想文は、楽しい活動と学びと将来の夢を生き生きと表現しており、子どもも保護者も4年生でのキッズ・ベンチャーを自然に受け入れているが、担任教諭の希望により今年度は時間数を削減。

今年度より新たに柏原市立T中学校で選択科目を使い、3年生20名を対象にキッズ・ベンチャーの試行を始めた。

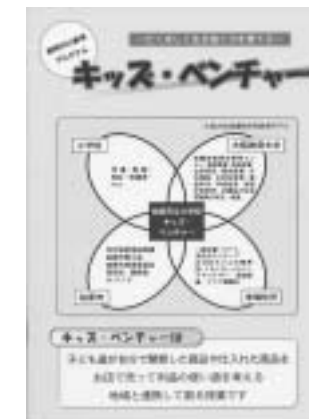
図表5 1 育成すべき能力と「キッズ・ベンチャー」における能力形成の場面

職業的（進路）発達にかかわる能力		小学校中学年の達成目標の例	小学校4年生「キッズ・ベンチャー」の活動場面
人間関係形成能力	自他の理解能力	<ul style="list-style-type: none"> 自分のよいところを見つける。 自分のよいところを認め、励ましあう。 自分の生活を支えている人に感謝する。 	<ul style="list-style-type: none"> 会社の経済活動全体（共通の目的を達成することを通じての集団作り） 活動の振り返り（サポーター、指導者、家族の励ましへの感謝、生活の実感）
	コミュニケーション能力	<ul style="list-style-type: none"> 自分の意見や気持ちを分かりやすく表現する。 友達の気持ちや考えを理解しようとする。 友達と協力して、学習や活動に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習過程における発表活動 新聞コンクールや商品決定時の自己主張と相互批判 会社での利益創出に向けての協力体制の確立
情報活用能力	情報収集・探索能力	<ul style="list-style-type: none"> いろいろな職業や生き方があることがわかる。 わからないことを図鑑などで調べたり、質問したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 商店街調査（商店街・お客・家族からのインタビュー） 商品開発（素材・作り方・道具の調べ学習）
	職業理解能力	<ul style="list-style-type: none"> 係りや当番活動に積極的にかかわる。 働くことの楽しさが分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> 創作活動（商品製造、ポスター、看板など） 販売当日の活動（挨拶、呼び込み、接客、金銭管理、商品管理） 商店街調査（働く人々への視点の獲得）
将来設計能力	役割把握・認識能力	<ul style="list-style-type: none"> 互いの役割や役割分担の必要性が分かる。 日常生活や学習と将来の生き方との関係に気付く。 	<ul style="list-style-type: none"> 役職の設定（社長、会計係、販売係、技術係など） 導入（生活とお金をもつて、自分の夢）
	計画実行能力	<ul style="list-style-type: none"> 将来の夢や希望をもつ。 計画作りの必要性に気付き、作業の手順が分かる。 学習等の計画を立てる。 	<ul style="list-style-type: none"> 事業計画の作成・販売の準備・商品製作手順の作成
意思決定能力	選択能力	<ul style="list-style-type: none"> 自分のやりたいこと、よいと思うことなどを考え、進んで取り組む。 してはいいけないことが分かり、自制する。 	<ul style="list-style-type: none"> 商品開発（他者を意識した製品作り） 利益と使い道（儲けの使い道と社会貢献） 会社の目的達成（相互協力の必要性）
	課題解決能力	<ul style="list-style-type: none"> 自分の仕事に対して責任を感じ、最後までやり通そうとする。 自分の力で課題を解決しようと努力する。 	<ul style="list-style-type: none"> 新聞コンクールへの参加（それぞれの商店街新聞の作成） 役職による役割分担（各係りによる製造・宣伝・販売の活動の責任） 社長としての集団の統率、意思決定の責任 商品開発（新たな商品の考案、製作上の課題）

（平成14年国立教育政策研究所）（平成17年大阪教育大学モデル「キッズ・ベンチャー」）

図表5 2 「キッズ・ベンチャー」の特徴的な指導の方法

<p>（1）葛藤場面の創出</p> <ul style="list-style-type: none"> ものづくりでの作りたいもの、作る方法、作りたい数などの初期イメージに基づく現実矛盾 商品の決定や儲けの活用などの意思決定時における個の主張と会社（集団）の目的との葛藤 他者による能力の評価と自己イメージのギャップ
<p>（2）達成感の体験</p> <ul style="list-style-type: none"> ものづくりやポスター・看板作りなどでの完成の喜び 会社の目標に向かって活動する自己に対する有用感 新聞コンクール、販売活動などの競争的環境における目標達成感
<p>（3）表現場面の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> 個人として、会社のメッセンジャーとしての多様な発表体験 適切な情報伝達の必要性への気付き
<p>（4）集団活動での適切な支援</p> <ul style="list-style-type: none"> 子ども達の意思決定を軽視しない程度のサポーター・教員の支援 子どもの具体的で実際的な質問や要求への対応



生涯学習の流れ

(新しい視点の生涯学習 家庭・学校・社会で育む発達資産 北大路書房 2007 年)

- 1965年 ユネスコ 成人教育推進国際委員会 ラングラン「生涯教育について」
- 1971年 文部省社会教育審議会 「急激な社会構造の変化に対応する社会教育のあり方について」
- 1981年 文部省中央教育審議会 「生涯教育について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/chuuou/toushin/810601.htm
- 1985～1987年 臨時教育審議会 「生涯学習体系への移行」

1991年中央教育審議会答申

「新しい時代に対応する教育制度の改革について」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/chuuou/toushin/910401.htm

- 「平等」と「効率」を両立させている日本の教育の特質を指摘 新しい時代にふさわしい「平等」と「効率」の概念を提示

個性に応じてそれぞれ異なるものを目指す実質的な平等
一人一人の生徒の特性や個性の開発において効率的な教育

- 大学進学準備を中心とした画一的な高等学校教育の問題点を指摘

学校教育を生涯学習の一環としてとらえることを提言

1996年中央教育審議会答申

「21世紀を展望したわが国の教育のあり方について —子どもに「生きる力」と「ゆとり」を—」

<http://shakai.edu.shimane-u.ac.jp/1192/siryou/tousin1.html>

一人一人の個性を生かすための教育の改善

家庭・学校・地域社会が、それぞれ適切な役割分担を果たしつつ、相互に連携して行うことが重要

近年の経済界における教育改革に対する関心の高まりを歓迎するとともに、これからの教育改革の実行に向けた経済界の一層の理解と協力を期待したい。

1997年教育職員養成審議会・第1次答申

「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/yousei/toushin/970703.htm

- 21世紀を目前にひかえ、今日の社会はかつて予想できなかったほど大きな変化に直面している。
- 今後特に教員に求められる具体的な資質能力
・地球的視野に立って行動するための資質能力
・変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力
・教員の職務から必然的に求められる資質能力

その後、私が一番最初に驚いたのは、1991年の中央教育審議会答申「新しい時代に対応する教育制度の改革について」でした。それまでの教育を非常に深く反省して、そこから一人ひとりの子どもに応じた平等と効率ということを述べ、さらに驚いたのが、「学校教育を生涯学習の一環としてとらえる」でした。このことを、このとき初めて知り、大変なことを始めているなと感じました。そのことが、その後「生きる力」と「ゆとり」という方向に行くと私は思っています。それから次第に家庭、学校、地域、開かれた学校づくりということ、そして経済界との協力ということも述べられていきます。

そして1997年、これは教員養成を進める上の方策ですが、「21世紀を目前にひかえ、今日の社会はかつて予想できなかったほど大きな変化に直面している」という認識に立って、どういう教員を養成していったらいいか述べられた指針が、「地球的視野に立って行動するための資質能力」を持った教員、「変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力」を持った教員、そして当然のことながら、「教員の職務から必然的に求められる資質能力」を持った教員を育てるということでした。これはものすごいことで、大変なことだなというのが実感です。

1998年には、2002年から「総合的な学習の時間」が導入されることに決まりました。このとき私は、「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること」というのを見て、びっくりしました。というのは、私が生物学を学んでいた大学時代、学部のときは卒業研究で研究とはどういうものかを学ぶ。修士に入ったら先生から与えられた課題を解決する。そして博士課程に入って、自分で見つけた問題を自分で解決する。これは博士課程の作業だというふうに私は思っていましたので、これを総合的な学習の中でやっていこうというのは、本当に驚いたわけです。生涯学習ということを見ると、われわれは一生を通してこういうことをやっていこうということととらえれば、理解できるかなという気はしましたが、これは非常に大きなショックでした。

そして、そのとき「自己の生き方についての自覚を深めること」ということも書いてありました。

「総合的な学習」が導入された当時、テレビCMで「どうしてべんきょうしなければいけないんですか？」という子どもの声が流れていたことを覚えておられる方もいるでしょう。私はまさにそれと同じで、「何で勉強せなあかんのやろか」という思

1998年教育課程審議会答申

幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/kyouiku/toushin/980703.htm

- 「総合的な学習の時間」創設 (2002年から導入)
趣旨：各学校が地域や学校の実態等に応じて創意工夫を生かして特色ある教育活動を展開できるような時間を確保すること。
[生きる力]をはぐくむことを目指す今回の教育課程の基準の改善の趣旨を実現する極めて重要な役割を担うもの。

ねらい：自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。
問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育成すること、……自己の生き方についての自覚を深めることも大きなねらいの一つとしてあげられよう。

2002年頃、 子どもの声で流れていた ある企業のテレビコマーシャル

私のことは私が決めてはいけませんか？

好きなことだけ勉強してはいけませんか？

勉強しないとどうなるんですか？

どうして勉強しなければいけないんですか？

何を勉強すればいいんですか？

2003年中央教育審議会答申

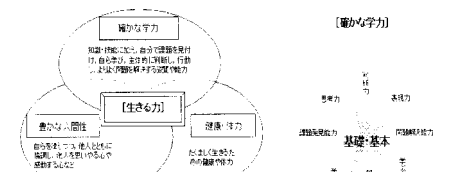
「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/0310701.htm

- 学習指導要領の「基準性」の一層の明確化
- 必要な学習指導時間の確保
- 「総合的な学習の時間」の一層の充実
- 「個に応じた指導」の一層の充実
- 全国的かつ総合的な学力調査の今後の在り方やその結果の活用

○ 子どもたちに基礎・基本を徹底し、[生きる力]をはぐくむことを基本的なねらいとする新学習指導要領の更なる定着を進め、そのねらいの一層の実現を引き続き図ることが必要。

2003年中央教育審議会 「初等中等教育における当面の教育課程 及び指導の充実・改善方策について」



【確かな学力】とは、知識や技能に加え、思考力・判断力・表現力などまでを含むもので、学ぶ意欲を重視した。これからの子どもたちに求められる学力

キャリア教育等の推進に関する 既往の政府決定等

- 青少年育成施策大綱(抄)
- (平成15年12月9日 青少年育成推進本部決定)
- 若者自立・挑戦プラン(抄)
- (平成15年6月10日 若者自立・挑戦戦略会議取りまとめ)
- 若者の自立・挑戦のためのアクションプラン(抄)
- (平成16年12月24日 若者自立・挑戦戦略会議取りまとめ)
- 若者の自立・挑戦のためのアクションプラン(抄)
- (平成18年1月17日(改訂)若者自立・挑戦戦略会議取りまとめ)
- 再チャレンジ可能な仕組みの構築(抄)
- (平成18年5月30日 再チャレンジ推進会議中間取りまとめ)

キャリアとは 生涯を通しての人間の 生き方・表現である

エドガー・H・シャイン キャリア・ダイナミクス

生涯を通しての 組織(集団)と個の問題

未曾有の激しい変化の時代に対応 する教育改革におけるキャリア教育

- 地球人類としての集団運営が求められる現代社会の中で
- 一人ひとりがどう生涯を通して生きてゆくか
- ということが問われているキャリア教育

いがありました。

その後、「総合的な学習」はなくなるという声もありましたが、それに対してまた、「総合的な学習を続けていく」という答申があり、そこで「確かな学力」というものが示されて、本当にやる気があるのだなと思いました。

そんな流れの中でキャリア教育というものがあって、これはまた国策とも一致した流れになっているのだらうと思います。

キャリアとは何か、これは非常に難しいことで、いろいろな考え方があります。「生涯を通しての人間の生き方・表現である」という言い方をした人もいます。私は、こういう簡単な言い方のほうが分かりやすいと思います。キャリアとは、自分がどう生きるかという問題。それは自分の問題であると同時に社会の中で生きるということ。社会の中で集団として生きるから難しいのであって、生涯を通しての、組織(集団)と個の関係というのが、一番本質的な問題

ではないかと考えています。

これからの未曾有の激しい変化の時代。これからは地球人類としての集団運営が求められる、そういう大きい問題があって、その中で一人ひとりがどう生きていくかという問題。そういう問題に直面していくのが今の子どもたち。それがこれからのキャリア教育の一番大切な部分ではないかと考えております。